

論文審査結果の要旨

本論文については、博士論文公開審査会（令和4年2月17日、於文学部会議室）において内容説明がなされ、その後質疑応答が行われた。公開審査会で提出された主な論点は、以下のとおりである。

- ①詩話について。
- ②抄本と月窗本との関係について。
- ③蘇軾の文集の扱いについて。
- ④江西詩派について。
- ⑤南宋の出版状況について。
- ⑥コミュニティ内でのやりとりと商業性との関係について。
- ⑦本論の構成および書き方の問題について。

本論文は、南宋期に刊行された詩話について、その内容を比較検討するとともに、建陽という出版と道学者の活動が盛んな地域に着目しながら多くの資料を精査し、体系をもった理論的な詩話が生まれる背景を明らかにしたものである。

従来の詩話研究は各詩話の文学主張の比較や文学批評史における位置づけの検討、詩話で採りあげられるテーマに関する研究、あるいは詩話を利用した詩人研究が主であり、詩話が編集・出版された地域社会との関わりという視点から考察を加えるものは多くない。詩話の中でも最も体系的で、その後の詩論に大きな影響を与えた『滄浪詩話』は詩話研究においては特に重要視され、これまでも『歳寒堂詩話』や『詩人玉屑』との関わり、編者に建陽（建安）出身という共通点があることなどは指摘されている。しかし本研究のように、建陽周辺の知識人の文集にまで広く目配りしてその関係性を検証したものはこれまでにはなく、かつ詩話の流伝や詩論の共有に、包揚・包恢親子が関与したであろうこと、また彼らが朱熹や嚴羽と密接な関わりを持っていたことを指摘した意義は大きい。この論によって、これまで漠然と関連性が指摘されてきた『歳寒堂詩話』と『滄浪詩話』、あるいは嚴羽と朱熹との関わりがより具体的なものとして提示されたと言えよう。

審査会で提出された意見の中で主なものを挙げれば、本論では詩話というジャンルの確立に詩話総集を刊行した出版業者が影響を与えた可能性を指摘するが、それはそもそも雑駁な記述から作詩の指南、体系的な詩論までを包摂する詩話を当時の人はどう捉えていたのかという問いにも繋がる問題であり、今後のさらなる検討が望まれるとの指摘があった。また、本論で採りあげられた詩話は一般的には江西詩派に対して批判的であるとされているが、本論を読むとあらためて江西詩派の主張とは何なのか、嚴羽の主張とどこが違うのかといった問題が浮かび上がってくる。この点についてもいま一度考察する余地があるとの指摘があった。また、第二章では蘇軾の文集に関する書誌情報が十分に示されていないこと、第三章では出版とネットワークという視点から全体をまとめたためか、『詩人玉屑』を「商業性と内輪に向けた要素を併せ持つ両面的な書」と記しているが、内輪でのやりとりと商業性との関係性が明確でないなど、

説明や書き方にいくらか補足や工夫が必要である点が指摘された。

以上のような課題も残すものの、本論文は、従来にはない視点から、膨大な文献に対して精密な調査を行うとともに、宋代文学を考える上で重要な意義のある結論を提示し得ており、本学における博士の学位授与の評価基準を満たしているものと判断される。よって本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値することを認める。